

## 子どもの見かたと大人の見かた



鬼丸吉弘

少し話がそれれると思うかたもありましようが、私にとつてたいへんショックに思われた事件からお話したいと思えます。

最近のことでしたが、私のところの学生が、市内のさる中学に数週間教育実習に通っていました。実習の最後の仕上げとして研究授業が行なわれ、私もその授業に立ち合う機会をもつたのです。課題は木炭の写生ということで、クラスの全員がそれぞれ一個ずつ、自分の机の上に置かれた木炭を鉛筆で写生するところでした。

木炭という、このくすんだ、まったくじみな色合いをして、形もこれといつてきわだったところのない対象を取り上げ、これを忠実に紙の上に写すということは、もちろんそのねらいが事物の正確な観察、しかも日常もつとも見すごされやすいものに対す

る、注意深い観察眼を養おうという意図からであることは、言うまでもありません。そしてものに対する客観的な関心、冷静な見かたへの志向は、この年齢期には一般に高まりつつあることですから、この時期にこうした試みを課題に組み込むことは、さしあたり悪いことではありません。

ところで子どもたちが描写に着手する前に、先生（教生）から種々の注意が与えられました。それはもちろん対象を適切に観察・描写するための助けとなるはずの事項が主だったのですが、その中で彼女はつぎのことを強調したのです。

「よく観察してごらんなさい。皆さんの机の上にある木炭を斜めに見ると、手前の切り口は向う側の切り口より大きく見えるでしょう」と。

ですがこのことは、はたして真実でしょうか。

私たちは戸外に出て、街を遠く見たずとします。たしかに、並んだ家々は遠ざかるにつれて小さくなり、道路も、並木も、すべて同様です。それらの線をたどってどこまでも延ばして行ったら、それはついに一つの点に集まって消えて行くでしょう。そしてそこからあの遠近法の原則、画面に平行する線はどこまで行っても交わることはないが、画面に傾く線はそれらが平行なら、つねに一点で交わるという、線遠近法の原則も出てきます。これは確固不動の原理、動かすことのできない視覚の法則のようであり、そこにはなんの疑問をさしはさむ余地もないかのようです。

しかしふり返って子どもの机の上にある木炭を見てみましょう。はたして向うの切口は、こちらの切口よりも、ほんとうに小さく見えるでしょうか。——いや、そんなことはありません。

私は木炭の太さの不規則性を指摘しているわけではありません。木炭はもともと生きた樹木だったので、ほぼ円筒状とはいっても両端で大小はあるかもしれません。しかしここでは、その大小を問題にしているのではむろんないのです。そこでもっとわかりやすい例として、長方形の物体を取り上げてみましょう。皆さんの机の上に、目の前に、小さな箱でもよし、本でもいいのですが、置かれているとします。それをつくづくとごらんになった

ときに、はたして手前の一边は、向うの一边よりも長いと目を感じるでしょうか。

答はもちろん否、でしょう。すでにお気づきのとおり机の上では、こちらのへりはあちらのへりと、まったく同じ長さに見えます。この箱は、あの街を眺めたときとは異なって、遠ざかるにしたがって縮むということをしません。換言すればあの線遠近法の原則が、ここではぜんぜんあてはまらないのです。いったいこれはどうしたことでしょう。

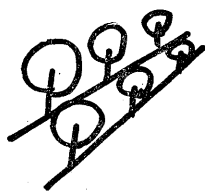
疑問は目と対象との間にある距離を考慮に入れるとき、はじめで解かれます。目と対象との距離が近いとき、あの線遠近法の現象は起きないのです。逆に目と対象との距離が開けば開くほど、あの縮減現象もまたいちじるしくなります。

ですからさきの教生の指導は誤りであり、誤りはこの関係を知らなかったからにはかなりません。教生はもとより、彼女の指導に当たった当の中学の美術教師もこのことを知らなかったことからきています。そしてその結果は、正しい見かたを否定し、まちがった見かたを子どもに強制したことになります。恐ろしいことだと言わねばなりません。子どもたちの絵の指導者、専門の美術教師として認められている人びとでさえこのとおりですから、いわんや一般の人びとの間で、ある種の固定したものの見かたが、

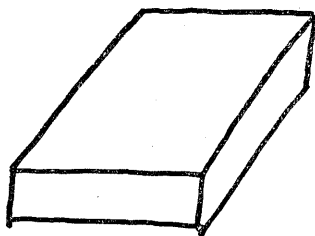


(横顔に正面向きの目)

近視



遠視



正常視

あたかもそう見えなければならぬ原則のように、固く信じこまれているとしてもふしぎはありません。けれども子どもの絵を問題にするとき、大人のこうした固定観念ほど始末の悪いものはないのでして、その害は子どもの年齢が低ければ低いほど、ますますはなはだしいのです。

ところで遠近法的にものが見えるとき、物体は遠い方で小さく、近い方で大きく、形がじっさいと違って変形しています。そしてこのことはさきにも指摘したとおり、目が対象からある程度以上離れたときに起こります。それでいまこれを、遠視と呼んでおきます。

目でもっと近づいて、箱のへりが手前も向うも同じ長さに見える見えかたは、ものの形が変形しないので、正常視としましう。

ものの見えかたはこうした関係から考えて行きますと、二通りあるかに見えますが、じつはまだほかにもあります。

私たちの目が、さらに一層対象に近づくとします。するとさきの箱なら、もはや全体を一望のもとに見渡せず、ある一つの面だけしか見えぬ位置に来るでしょう。この場合、対象全体の映像を得るためにはどうしたらよいでしょうか。箱そのものをぐるぐる

回すか、もしそれがもっと大きな対象なら、自分がその回りを回り、上・下からも眺めて、はじめて全体のイメージを獲得することができるでしょう。このような見かたもじつさい存在するので、これを近視と呼ぶことにします。皆さんはここで数人のめくらが象を見物に行った、インドの寓話を思い出されるかもしれませんが、あの寓話は、部分を見て全体を見ないたとえに使われますが、たしかにこの見かたでは、全体の統一像を得るためには、一種の創造力を必要とします。そして目の見えぬ人の見かたにたとえるのは別の意味でも正当でして、これはあたかも盲人が手さぐりで知ろうとするのに似ていますから、また触覚的な見かただとも言えます。

子どものものの見かたを考えると、じつはこの第三の近視的な見かたが非常に重要なのです。子どもは大人と違い、対象との間に距離を置いて、冷静に、客観的に眺めようとはしません。現実には離れていても、心の中では、あたかも対象に密着するような態度で見えています。ですから子どもが最も子どもらしい絵を描く時期、いわゆる図式画期の典型的画法である、〈折り返し〉とか、横向きの輪郭に前向きの目がついた奇妙な顔は、ただこのことを考慮することによってのみ、正当に理解できるでしょう。

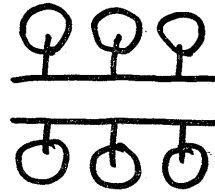
典型的な図式画期は、年齢的には小学校の低学年を中心に、多

少その前後にわたるでしょう。それで、幼児期の絵を理解するためにはこれだけでは不十分です。私たちはさらに進んで上記の目と対象との関係を、一層極端にした場合をも考えねばなりません。そうすると目はもはや対象を外から眺めているだけではなく、対象の内部に入って、あたかも自分がその対象になりきるか、内側からその対象を組みたてるような気持ちでものに対する場合を考えねばなりません。このような例は幼児期の描画を観察すれば限りなくあげることができますが、一つだけ示すとすればあのふしぎな絵、ほとんどあらゆる子どもが一度は経験する、〈頭足類〉または〈おたまじゃくし〉と言われる、あの最初の人間の姿がまさにそれだということを指摘しておきましょう。

私たちは目と対象との関係を追って、いまここで、〈内からの表現〉につきあたりました。ところで右の場合の〈内からの表現〉は、〈外からの見かた〉をまったく拒否しているわけではありませんでした。しかしこの過程をもう一度さかのぼるならば、その究極には——ついに外的世界の対象をもはや必要としない描画も、また存在しうることが、理解いただけるでしょう。〈なぐり描き〉とぶつう言われているものは、本来まさにそのようにして生ずるのであり、これに可視の対象を求めることはほとんど無意味です。それは目に見えぬものが目に見える形をとったのであ



頭足類



近視（折り返し）

り、子どもの身体性自体に即した感覚や感情が外部に現われた軌跡にほかなりません。あるときは紙上の散歩であり、あるときは自己の内部に感ずるリズムのくり返しであり、あるときは無地の外界へ自己を刻印する喜びです。このような場合、描線に外界の対象を探すことは、まったくの徒労にすぎません。

以上で私たちは描画の諸段階を、通常の大人の見かたから、逆にその源に向かつてたどる結果になりました。そして幼児から大人への道は、内から外へ、近くから遠くへの、見かたの順次的変化として考えねばならぬことを一応ご理解いただけたかと思ひ

ます。そしてこの場合、一般の大人の見かたとなつてゐるものは、はじめにあげた二つ、遠視とせいぜい正常視に関するものであり、反対に幼児の場合は、あとの三つにかかわるということになります。

そしてそこから結論されることは、描画に關しても、通常の大人の世界と子どもの世界が、いかに隔つてゐるかということですが、大人は離れて見ますが、子どもはいわば密接して、否それどころか事物の内部に入つて見ます。ですから大人にはもはやなんの感動も呼び起こさなくなつた外部の世界、灰色の散文的な世界が、子どもにはいきいきとした新鮮な生命感をもつて、体験されるのです。子どもが大きな目を見開いて、飽きもせず事物をじつと見続けているようすを想起してください。この子どもの原本的な体験を奪ひ、大人の色あせた世界を押しつける権利は、私たちのどこにもないでしょう。大人の常識的原理を楯に、子どもの絵の世界に干渉することがどんなに不都合なことか、あらためて痛感せずにはいられません。私たちは植物の生長を見守るように、描画の生長を見守つてやるのでなければならず、原理を無視した指導は、子どもを破壊する以外のなにものでもないことを知らねばなりません。

（北海道教育大学）